

長谷部真吾

(埋蔵文化財センター嘱託)

1 はじめに

平成 20 年の富山市内路面電車施設工事に伴う工事立会調査において、外堀南側の武家屋敷地とさらに南側の町屋敷地との境となる背割水路（下水）を検出した際に、竹を使った水道施設（竹樋）が発見された。

出土竹製品は、出土木材よりも脆弱で劣化しやすく遺存しにくいいため確認されている事例は少なく、文献以外でその利用方法を知ることが難しい。本稿では富山城跡から発見された竹樋を例に挙げ、竹製品利用の一端を明らかにすると共に富山県以外で確認された水道施設との比較・検討を行った。

2 我が国での竹利用の歴史

我が国において竹材を利用した製品の歴史は、古くは縄文時代の遺跡から発掘される遺物に見ることができる。しかし、竹は元来、温帯系の植物であるため当初は九州の南部など気候風土が温暖な地域にしか自生しておらず、竹製品の多くは耐寒性のあるメダケ等の「笹竹」が多く使われ、竹材は室町時代中期までは中国や東南アジアから輸入していた。

室町時代後期に竹の移植法が広く知られるようになり、全国のあちこちに治水灌漑のための竹林造成が盛んに行われ、竹林増大とともに籠や箆などの竹器が生活必需品として市場に出回るようになった。さらに、茶道の普及によって茶杓、茶筌など竹製品は幅広く用いられるようになる。

江戸時代になると、各藩が河川の治水のために積極的に竹林を造成していった。それらの竹林や竹藪は藩の公有か高持百姓の所有で自由に刈り出すことはできなかった。しかし、竹林全体の発育のために茂りすぎた竹の間伐材は安価で買うことができたため、竹林周辺に住む土地を持たない底辺の民衆が、資本もいらず手元に道具さえあればできる竹製品の製作を専業とするようになった（沖浦 1991）。

3 富山県での竹利用の歴史

富山県では福光町の梅原護摩堂遺跡から茶筌が発見されている。この遺跡は中世後期の村落で、この頃には竹製品が民衆にまで広がっていたことがわかる。文献では慶長末期から三代藩主利常によって御林の設置が始まり、寛永 9 年（1632 年）に新川群島尻村の竹林を「取立林」に指定し、地元農民にこれを監視させている。その後、寛永 9 年（1661 年）に砺波群では山田野・浅地・鷹栖・伊勢領村、射水郡では一宮・串岡・黒川村などに御藪があり（『山廻役御用勤方覚帳』）、その御藪に設置された竹は唐竹であることがわかっている（山口 2008）。唐竹とは富山県ではマダケとハチクのことで、この名称は中国（唐）より伝わった竹であることからそう呼ばれていた。

御藪の竹はどのように利用されたのか新川群の御藪を例に挙げると、新川群は上納金を得るためと富山城下で日用品を得るため年間約 3,500 本の竹を富山町に販売していた。その竹は建築用、竹細工用に利用された他に普請用にも用いられている。富山県には黒部川、常願寺川、庄川、小矢部川など県内を縦断する川があり、その氾濫を抑えるための川除普請が必要だった。当時の川除普請は竹籠の中に石を詰めて川除堤を作っていた。普請用の竹は御用竹と呼ばれており、竹籠はこの竹から作られ 1 回の普請で使われた竹は弘化元年（1844 年）の記録によると 22,504 本にもなる。竹籠は川の増水などで耐久性が無くなりすぐに壊れてしまうため毎年新たな竹籠が必要となった。そのため領内の竹がしだいに枯渇し始め、寛文期から加賀藩は藩内の竹を他国領へ移出することを禁止するようになった。さらに幕末になると竹の一大産地である長州藩から竹材の輸入が始まり、安政 5 年（1858 年）には約 30 万本もの竹が輸入された（富山県 1983）。

このように竹は、歴史的に見ても我々の生活と深く関わっており、富山県においてもなくてはならない植物であったことがわかる。

4 石川県・福井県での竹樋の出土例

竹を用いた水道施設は全国各地で発見されているが、今回は近隣の石川県と福井県での出土例を紹介したい。

石川県では昭和町遺跡（金沢市教委 1998）、醒ヶ井遺跡（金沢市教委 2001）、木ノ新保遺跡（石川県教委 2002）から竹樋と木製の継手が発見されている。竹樋は溜め枘か井戸に接続されており、検出した竹はいずれも節が取り除かれ管状になっていた。木製の継手には埋設方向を変えたり、竹樋を延長したりする目的があったと考えられている。長田町遺跡（金沢市教委 1998）から発見された竹樋からは継手が発見されておらず、竹樋のみが出土している。そのため竹管から直接、井戸に繋いでいたと考えられている。この4遺跡はいずれも金沢城下北西端部に位置している近世の城下町遺跡で、正確な年代はわからないが、近世から近代にかけての遺物と推定されている。

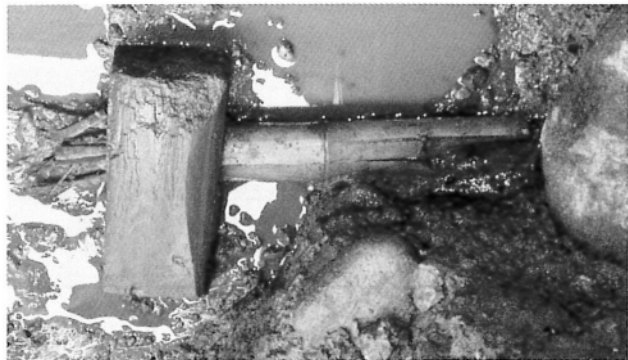
福井県の福井城跡からは各屋敷への給水に関わる遺構として竹管、桶製の溜め枘、汲み上げ井戸が発見されている。福井城下の湧水には多量の鉄分が含まれていたため、飲用水には不適であった。そのため、福井城（北庄城）築城と同時に上水道が開削されており、発見されたのはその一部である。上水路の一部では江戸の上水路と違い、開渠のまま屋敷近くまで入り込む開渠式上水路も見られた。これら竹管上水道遺構は、出土遺物から幕末～明治頃と考えられている（福井県教育庁 2004）。

5 富山城跡より出土の竹製水道施設

今回発見された竹樋は水を通す竹管の一部と竹管同士を繋ぐ木製の継手である。竹樋は背割下水の東西方向の石積みに直交し、最下段の石積みの下を通して竹管を北方向へ延ばし、その竹管を木製の角材に穴を開け固定された形で発掘された（富山市教委 2009）。

竹管は途中で切断されているため正確な長さはわからないが、取上げた際の竹管の長さは最長 42.5cm、節間長は約 23cm である。平面図より北側の竹管の長さを推定すると 1.5m 以上の長さになる。節の節環は 2 つあり、節環の上部は凸状に隆起した「節輪」が見られ、節環の下部には稗鞘痕を示す「稗鞘輪」が見られることからマダケであると考えられる。この竹管は節が取り除かれ管状になっていた。色調は発見当時、鮮やかな黄緑色であったが、取上げてから数日経つと茶色に変色した。発見当時の色合いから生長 1 年目の「一年竹」と呼ばれる竹で、夏から秋にかけて伐採されたものと推定できる。

継手は木製で縦 14cm 横 28cm 高さ 13cm の長方体であり、側面に直径 6cm の挿入孔が見られる。発見当時、挿入孔の両側から



出土した竹管と継手

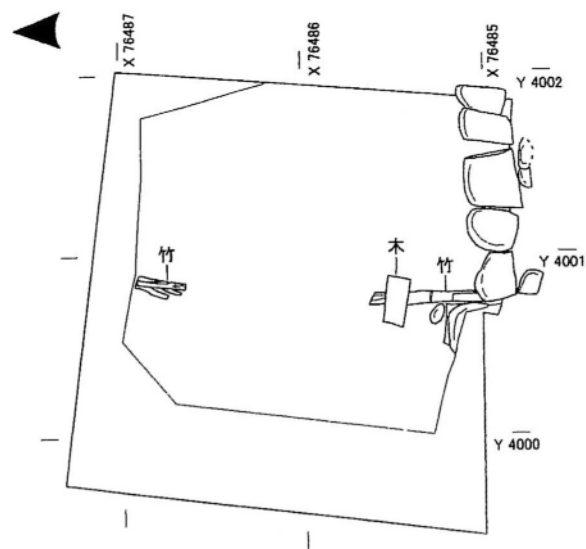


図1 背割水路平面図（1:40）

竹管が差し込まれていたため、水をより遠くまで送るためにこの継手を用いていたことがわかる。

6 まとめ

今回、富山城跡より発見された竹樋は発見時、まだ黄緑色をしていたことから竹を加工する際に行われる油抜きを施した「さらし竹」ではなく伐採後、すぐに竹樋として利用されていることがわかる。節間長も 23cm と通常のマダケの節間長が 30～50cm であることと比べると短く感じる。竹は寒冷な場所では節間の発育がよくないといわれており、節間が短いのは恐らくこのことが原因である。これらのことから今回出土した竹は富山県内の御藪より調達した竹であったと考えられる。また、竹管は 1.5m 以上と長いため、その節を取り除く際に稈を割らずに中を空洞にすることは困難である。どのように節を取り除いたのか考える際、参考になるのが大阪府の馬場川遺跡の事例である。この遺跡からは幕末の竹製の用水路跡が発見されているのだが、用水路に用いられた竹は竹稈を一度半分に割ってから節の隔壁を取り除き、再び元の形に戻してワラ状のもので巻いてあった。この方法であれば長い竹稈の節を容易に取り除くことが可能であるし、ワラ状のもので保護してあったために遺存しにくいはずの竹が今日まで良好な状態で出土したとも考えることができる。また、竹樋は各地の出土例と照らし合わせると、排水目的というよりは上水施設として利用されていたと考えられる。上水施設であることは石川県と福井県の城下町遺跡と共通するところであるが、武家屋敷地と町屋敷地の境からの発見は石川県と福井県だけでなく、それ以外の県での出土事例でも見ることができない特徴である。

今回、発見された竹樋は古絵図などではわからない富山城下町の様相を知る上で貴重な資料であるだけでなく、近世の北陸での水道施設整備をうかがい知ることができる貴重な資料でもある。前述したように出土竹は出土木材よりも脆弱で劣化しやすく、水漬けの状態でも 5 年程度で原型をとどめなくなってしまう。適切な保存処理を行い後世に伝えると共にさらなる解明のために引き続き調査することが望まれる。

<引用・参考文献>

- 富山市教育委員会 2009 『富山市埋蔵文化財報告書 36 富山城跡発掘調査報告書』
沖浦和光 1991 『竹の民俗誌-日本文化の深層を探る-』 岩波新書
山口隆治 2008 『加賀藩の入会林野』 桂書房
富山県 1983 『富山県史・通史Ⅲ』
金沢市教育委員会 1998 『金沢市文化財紀要 172 金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会 2001 『金沢市文化財紀要 173 金沢市醒ヶ井遺跡』
石川県教育委員会 2002 『金沢市木ノ新保遺跡』
金沢市教育委員会 1998 『金沢市文化財紀要 143 長田町 長町 穴水町遺跡』
福井県教育庁埋蔵文化財センター 2004 『福井県埋蔵文化財報告第 72 集 福井城跡』
富山新聞社 2001 『ふるさと富山歴史館』
室井緯 1973 『ものと人間の文化史 10 竹』 法政大学出版局
内村悦三 2005 『タケ・ササ図鑑-種類・特徴・用途-』 創森社
竹内靖長 2009 「江戸時代の上水施設-松本城跡における上水道構造-」 『季刊考古学第 108 号』 雄山閣
社団法人農山漁村文化協会 1993 『人づくり風土記 16 富山』
長谷部真吾 2006 「出土竹製品の保存処理法について」 『平成 18 年度文化財学科卒業論文要旨集』 金沢学院大学